

学友会東京支部だより

南高

発行 和歌山県立南部高等学校
学友会東京支部
事務局 〒363-0022
埼玉県桶川市若宮1-8-12-204
TEL・FAX 048-786-3514

秋のウォーキング

東大駒場キャンパス～日本民藝館へ

秋の散策に初参加して

森山 松子 旧姓:上山 (東京都中野区 在住)
1970(昭和45)年卒



駒場東大正門前

6年前、昭和45年卒業(22期)生の還暦の集いが国民宿舎紀州路みなべでありました。その折、同じクラスだった三本さんに南部高校東京学友会に入らないかというお誘いを受け、即、入会させていただきました。仕事の関係でなかなか催しに参加できず、今回、やっと「東大駒場キャンパス～日本民藝館への秋の散策」に参加することができました。

前日、同じ故郷といえ、初めてお会いする方が多いのではと、嬉しいのと同時に少し緊張して出かけましたが、集合場所に着くと紀州弁が飛び交い、同郷の者でしか分からない空気感が懐かしく、一気に緊張が解けました。

私は東京に住んで47年位になりますが、今回、初めて訪れた東大はさすがに広いキャンパス！校門に入ってくる学生さんを見て皆さん頭が賢いんだなあ～としばし見とれました。



新しい校舎に古い校舎、長いイチョウ並木と幾つもの巨木に歴史を感じました。その一つのヒマラヤスギの根元にとっても綺麗な薔薇のような松ぼっくりを見つけて三本さん達と大喜び！

その後、旧前田邸の立派なお屋敷を見学。ボランティアの案内係の金さんから「今でもきちんと残っているのは、腕の良い宮大工さんの仕事のおかげ」との説明をうけ感動しました。

散策のラストは駅前のマクドナルドで楽しいお茶の時間。2階の一角が賑やかになり、懐かしい話が飛び交い、みなべー色になりました。その後、お一人 お一人、自己紹介をしていただき、昔の記憶をたどりながらひと時、皆さまと一緒に故郷に戻ったようでとても楽しい一日でした。

数日後、木村さんから集合写真を送っていただき、また、皆々様には色々お世話になりありがとうございました。次回、お会いできる日を楽しみにしております。

今回の散策コース

2018年10月23日(火)

駒場東大駅前集合→東大駒場キャンパス
→目黒区立駒場野公園・ケルネル田んぼ→旧前田邸(和館)
→日本近代文学館→日本民藝館→マクドナルドでお茶
→駒場東大駅前解散



東大構内



ケルネル田んぼ かかしコンクール



旧前田邸(和館)

第9回 南高学友会東京支部総会・懇親会決まる

日時:令和元年6月16日(日)11:30～14:30

場所:水道橋グランドホテル

懐かしい人たちと昔話で楽しい時間を過ごしませんか お早めにカレンダーに予定の記入をお願いします

「ヤッホー、今年も忘年会をやるよう!12月1日14:30に小田原駅に集合。箱根フリーパスを買っておくこと」K会長からの連絡が携帯メールに入る。

2、3日すると電話で「勿論、参加だね。予定に入っているから頼むな!」こちらの返事も聞かずに電話は切れる。今年の忘年会もこうして始まった。

当日はみなべからも2人の参加があり、千葉、埼玉、東京、横浜と各地から三々五々、小田原駅に集まってきました。でも、小田原駅は広い、集合場所がわからない。小田原駅のどこ、新幹線の改札、JR線の改札、小田急線の改札、どこかのお店の前…。しっかりしているようでどこか抜けているのがいつもの39会らしいところなのだ。

うろうろと探していると携帯電話が鳴る。

「もう、着いている? 駅中の喫茶店「XXX」にいるから早よこいよ」なんとか全員集合。最初の目的地である新しくなった小田原城に向けて出発。

歩きはじめると久しぶりで積もった話で会話が弾み足が進まない。

「病気はないの? 元気なの?」「子供さんはどうしているの?」「おばあちゃんの具合はどうなの?」「Mさんはどうしている?」……歩きながら楽しい会話がが続くのですが、足は進まず、普通の半分の速度で時間がかかる。やっとのことでお城に到着。



小田原城

お城の正面で記念写真、「はよ、みんな集まってよ。もうちょっと前へ」写真を撮るにも時間がかかる。

「N君、そこの男の子に頼んで、早よ入れよ」中学生の男の子に頼んで記念写真。



「僕は何歳、中学生? おいやんらはセブンティーン。分かる?」K会長が聞く。

男の子は答えに困っているがおかまいなしに「ありがとうな、勉強がんばれよ」と言って離れる。

「天守閣に上がる? どうする?」「上がる、上がる」「俺はいいや、下で待っているから、皆で行ってこいよ」一人を残して上がる。いつもまとまるようでまとまらない。

途中で若い女性のグループがいると声をかける。「どこから来たの?」「東京からです」「東京のどこ、僕は和歌山から来たんや。中学の同窓会や、和歌山のみなべて知っている? 梅干しの南高梅のとこや」

迷惑そうな顔で「南高梅は知っているよ」と答えが返ってくると「いろんな梅があって美味しいから食べてよ。健康になるよ」と返す。

こんな調子で39会の旅は続く、小田原城の見学を



箱根登山鉄道

みんなマイペースで歩き、駅に向かう。これから箱根湯本のホテルに宿泊、予定の時間を全く無視の旅である。湯本でバスに乗り換え無事にホテルに予定を大きく遅れることなく到着できた。



伝統の製法を守りながら漬けた梅干が「れめ」なのです。



特選A級
紀州南高梅使用

れめ®



紀州でまりのように丸くてやわらかい梅一粒を大事に大切に心を込めてつつみました。

毬乙梅
まりおとめ

井上梅干食品株式会社
〒645-0012 和歌山県日高郡みなべ町山内1095-1
TEL. ☎0120-01-2730 FAX. ☎0120-04-2412

東京銀座店 03-6274-6033 中央区銀座5-10-12 東洋ライズビル7F
みなべ店 0739-72-5223 高野山店 0736-56-4774
ホームページ: <http://www.kumaheinoume.co.jp/>

入浴、夕食のあと、部屋に集まって話がはずむ。
「A君、あいつはどうしているかな?」「B君に10年ぶりに孫が生まれたよ」「C君は調子が悪いようだよ」「田舎のお墓はどうするんや」「D君の家はもう、みなべにはないんか?」「Eさんは勉強もできたし、スポーツもできたな」「小学校のときは腹が空いたら、桑の実を食べたり、山桃の実を食べたり、椎の実を食べたり色んな物を食べたな。桑の実では服を赤く汚して怒られたな。毎日、ひもじかったからな」「……」
「Y先生は元気か、久しぶりに会いたいな」
「お前は中学のとき、何組だった? 誰と一緒にだった。お前とは一緒になったことはないな」
終わりのない話、“あがら39会”の懐かしい会話はつきることがない。青春の思い出が湧き出してくる。終わりそうにない。

「明日は早いからもう寝よう」やっと1日目は終了。
明日は箱根1周のフリーパスでの旅。今日と同じように、ワイワイ、ガヤガヤ、ベラベラの旅は続くのだ。
皆で顔を合わせて話していると次から次へと話題が出てきて、みなべ弁の会話は終わりそうにない。電話もメールも発達して、どこでもすぐに繋がり話せる時代

だが、やはり顔を合わせて話すと楽しく、懐かしい昔の話が次から次に出てきて終わりそうにもない。中学生にもどり時間を忘れて話が続く。

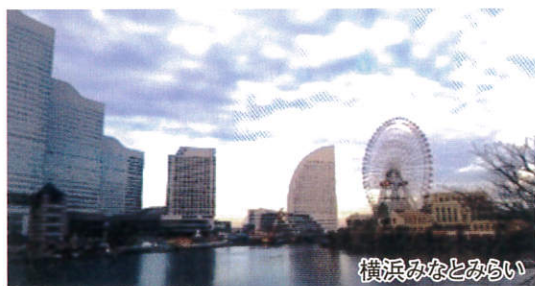
情報網が発達して連絡はすぐできるようになったのだが、顔を合わせての会話や集まることの大切さを感じさせてくれる。

田舎での貧しい時代を生きた子供時代の思い出は尽きることなく楽しい思い出として湧き出してくる。“あがらんちゅう39会”ありがとう!

われらセブンティーン、同窓会、梅干し、ねーちゃん、おばヤンはどこから?



芦ノ湖と富士山



横浜みなとみらい

結婚してからずっと横浜に住んでいます。もう44年になるでしょうか。
みなとみらいや元町、中華街くらいまでなら散歩がてら歩きます。ランドマークタワー、大観覧車、赤レンガ倉庫、運がよければ大きな白い帆を張った日本丸や世界の

豪華客船に遭遇することもある。主人の母も同じ横浜市内、車で30分のところに住んでいます。元々地図を見るのが好きで、道には滅法詳しい義母は94歳を過ぎるまで、バスや地下鉄を乗り継ぎ、一人で出かけるのが趣味でした。新横浜駅やセンター南駅で、孫である私の娘とばったり出くわしたことも。今でも娘は「あの時はおばあちゃんに会って本当に驚いた」と笑いながら話します。

一昨年の4月、いつものように出かけた帰りに、乗っていたバスが急停車し、義母は座席から放り出され、大腿骨骨折という大けがを負ったのです。初めての救急車、初めての入院、そして初めての手術。94歳にして怖い思い、不安な思い、痛い思いを経験したのでした。一緒に暮らしている主人の姉は、このまま寝たきりになるのではと心配で夜も眠れなかつたとか。高齢者の骨折は寝たきりにつながるべく聞くので、義母の気持ちは痛いほどわかりました。

が、義母は復活したのです。とにかく前向きで真面目な性格の義母は若い人に負けないくらい一生懸命リハビリに励み、今では念のために杖を持ちますが、普通に歩けるまでに回復し、私たちと一緒に買い物に行ったり、近くの公園を散歩したりしています。
転ばないように、周りの人に迷惑をかけないようにとそれはそれは気を付けて生活しているのも災難に遭うことがあるんですね。でも高齢だからと諦めず、リハビリを続ければ回復することを教えてくれました。義母のことだから100歳を過ぎても元気に外を歩き、そしてひ孫の成長をしっかり見守っていてくれるでしょう。



：義母のこと：

坂元 由紀
(横浜市在住)
1971(昭和46)年卒



125ccのバイクで走り回る！

野田 恵津子 旧姓:平野
(田辺市上万呂 在住)
1967(昭和42)年卒

みなべの堺から田辺に嫁ぎ、後数年で半世紀が過ぎようとしている。4人の子供たちは独立して巣立ち、現在は夫と二人三脚で歩む毎日。

子育てをしているときは、早朝にゴルフ練習場のボール拾いから始まり、スーパーのレジなどのパート仕事を3~4箇所も掛け持ちしながら働いた。他人からはスーパーウーマンのようだと言われたが、我が家では夫もしかり、夫の父親もたいそうな働き者であったので、一生懸命働くのは当たり前のことと思っている。

仕事の合間に庭で畑仕事をするのが夫の趣味。無農薬野菜作りに精を出し、春菊・ブロッコリー・水菜・ネギ・胡瓜・ナス・ミニトマト・玉葱等、四季折々の野菜を作っている。また庭には、シークワサー・三種類の柿・レモン・キンカンの木があり、大半のお世話は私の仕事の一部。これらの農作物を親戚・友人・知人らに味わってもらうのが、我々夫婦の喜びであり、持ち帰り用にスーパーのポリ袋を玄関わきに置いてある。



家事に始まり畑仕事、子育て最中の共働きの子供たちを手助け、そしてヘルパーという多忙な現在であるが、自作「餅まきスケジュール表」を片手に餅拾いに行くのが、私の唯一の趣味。

8年程前に餅まき好きの友人に同行し、すっかり餅拾いにはまり、NHK番組「ドキュメント20min.」で取材を受けたことがある。「オーストラリア人が見たMOCHIMAKI餅まき!」というテーマで、レポーター役のオージーが私『田辺市の餅拾い名人、野田恵津子』に密着して、各地の餅まき行事に参加し、その楽しさを紹介する番組であった。



1号館前の文化祭垂れ幕

神社・寺院のお祭りや棟上げ式、地域・学校行事のイベントとして餅まきは欠かせない。特に和歌山は餅まきが盛んで、「餅まきの聖地」と言われ、県内で年に数百回も、千回に及ぶとも言われる。「めでたいことがあったら、餅まきやー!」と、和歌山県民はいつでも、どこでも、餅をまく。ありがたいことに『和歌山餅まきカレンダー』まで作られていて、日時や場所の詳細がネットで検索できるのである。

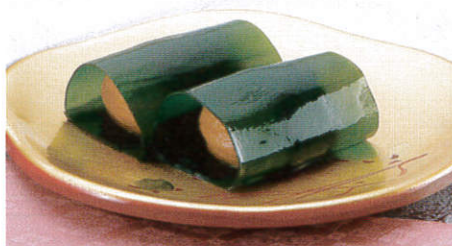


旧体育館

今年も、南高の文化祭で餅まきを楽しみ、また先日5ヵ所を駆け回って160個の餅拾いをして、年末年始の時期に喜ばれるおすそ分けができた。

同級生は今年70歳の古希を迎えているが、早生まれの私は来年が古希の年祝。健康維持のためにも、元気で働ける間は頑張ろうと、早朝のラジオ体操を済ませ、今日もバイクを走らせる。

※オージーとは「オーストラリア人」という意味で「オーストラリア」「オーストラリアの」というときにも、この言葉を使います。



梅をつつむ贅
幸々々々
『黄金漬』をやわらかな道東産の樟前昆布で
つつんだまろやかで旨味豊かな梅干しです。



元祖はちみつ梅
黄全漬
選りすぐりの紀州南高梅とはちみつが
醸し出す、まろやかで上品な梅干しです。

梅
はちみつ

通信販売カタログ・商品のお問合せ、お求めは

電話

フリーダイヤル 0120-197-832

FAX

フリーダイヤル 0120-319-515

受付時間 平日/午前8時~午後6時 土曜/午前8時~午後5時

FAXおよびホームページでは24時間、受け付けております。

株式会社梅一番井口 和歌山県日高郡みなべ町西本庄1224

http://www.umel.com/





永井 俊子
(みなべ町徳蔵 在住)
1965(昭和40)年卒

..母のこと..

身内のこと、書きたいけれど読む方はしらけるかな。
母は大正10年生まれの97歳ながら、元気 元気 !!



スペイン モンセラットの教会

一昔前「大阪へ法事に行ってくるワ!」と出かけ、10日間程経って「北京へ行ってきてん」と涼しい顔で帰ってきたり、またあるときは「バリ島へ行ってきます。帰ったらバリバリ仕事します!」と、駄ジャレにまで気配ったメモをテーブルの上に置いたまま4日間程いなくなったこともあった。

母の娘の頃は、まだ戦争も始まっていなくて、大阪府立夕陽丘高等女学校では英語を学び、洋画を鑑賞し、喫茶店では学友と、今でいうスイーツを堪能・・・と、青春を謳歌したようだ。松下幸之助翁のお嬢さんとは同じクラスで親しかったらしい。卒業後、住友銀行本店に入社、周りも羨むほどのキラキラしたオフィスガールであつたに違いない。

なのに、酒造会社の支店長として北京に赴任することになった姉夫婦に子守を頼まれ、銀行をあっさり退職し、北京行きを敢行する。どうもこの頃から「見ぬ世界」への好奇心が頭をもたげてきたようである。

北京では人力車で『ドロボウ市場』と呼ばれるような怪しそうな場所などもモノともせず、あちこちを廻り、義兄たちをヒヤヒヤさせたことも度々だったとか。戦禍の厳しくなる前に帰国したらしく、残留孤児や引き上げの苦労は知らないと言う。

父と母の馴れ初めは、大阪の造幣局で中尉だった父が母の実家に下宿をしていたことに依る。戦前教師だった父は戦後「国賊」呼ばわりされ、教師復帰はなかった。和歌山の生家に戻り、農業に打ち込んだのである。

都会のお嬢さんが水道もガスもない田舎に嫁ぎ、慣れない手でかまどに火をつけ、紀州茶粥を炊き始めたのだ。周りの反対を押し切って夫となる人についてきた意地もあったであろうが、何よりも彼女の豪胆さが、この地で生き抜く、という揺るぎない信念を醸成していったのではなかったか。母は自分の言うことを聞かないと、よく私のほっぺたをつねった。常々、「男に生まれたかった」と、言っていたが、「負けるもんか!」という自分なりの矜持(きょうじ)根性を持っていたのであろう。



大阪四天王寺

10年ほど前だったか、「大阪の四天王寺へ行きたい」と言うので、ひ孫(私の孫)たちと一緒に出かけた。「ここを歩き、あそこを通り抜けて・・・」と指さし、手振りの母の後ろについて四天王寺の境内や周辺を歩いた。5年間1日も休まず寺田町から夕陽丘女学校に歩いて通ったことを話す母の目は、キラキラしていたものだ。「こうして元気でいられるのはいっぱい歩いたことかな」と懐かしそうであった。このように好奇心旺盛かつ行動力横溢(おういつ)の母は“飛んで飛んで、回って回って・・・”を地で行き、ヨーロッパ・中南米・東南アジア・中国・オーストラリア・ニュージーランド・・・と「地球を一周半も二周もしてきたかな」とこともなげに言う。この「何でも見てやろう!」という旺盛な意欲は何なんだろう、どこから湧いてくるのだろうと首を傾げながらも「よしっ、私も・・・」と学ぶことが多い。母に比べれば私の「青年の船」の55日間など霞んでしまうけれど、「思い出を共有し、同じ体験談を50年経っても話せる友がいっぱいいいよ!」と、公言できることでは、母にも負けてはいないと思っている。母の歳になるまで まだ26年もある。



フランス モンサンミッシェル

ふるさとの便り

山崎 崇 (みなべ町東本庄 在住)

1971(昭和46)年卒

ところがその頃、父が病気になり、長男であった私は家業の農家を継がなければならなくなり、梅農家となりました。

当時、みなべの南高梅がようやく世間に知られるようになり、みなべではそれまでのみかん・米・キャベツ・豆作りから、ほとんどの農家が梅生産者になっていった頃でした。



冬場の11月～1月は梅の剪定、2月～3月は梅の花が満開、4月～5月は薬剤散布、除草、そして6月は収穫、7月～10月にかけて梅干し作業、農閑期には海釣りや家族旅行等を楽しみます。生産は疲れますが、成し遂げた後はサラリーマン時代には味わえなかった清々しい気分になりました。

一時はNHKでも放送されましたが、所得の伸び率が全国一位といわれる村に成長しました。そんな中、少しずつ梅の流通について疑問をいだき、それならば新しいシステムをと、昭和60年に梅の流通の世界に飛び込み、会社を設立して今年で33年目となります。

その間には梅の低迷時期が何度かありました。健康ブームで再び梅の人気の高まってきましたが、数年(平成18年～25年)の価格低迷時期が続き、梅作り農家の後継ぎが激減・農家の高齢化・人手不足と、販売に生産が追いつかない状況になりつつあります。

・当時の思い出の歌やできごと

ブルーライトヨコハマ(いしだあゆみ)

風(シューベルト)

真夜中のギター(千賀かほる)

京都の恋(渚ゆうこ)

恋の季節(ピンキーとキラーズ)

よど号ハイジャック

三島由紀夫の割腹自殺事件

カップヌードルが日清食品から発売

ウーマンリブ

いざなぎ景気 経済大国 脱サラ

3年生の時には日本万国博覧会が大阪で開催

今、この文章を書きながら学舎で学んだ3年間の懐かしい出来事、思い出がよみがえってきています。私にとって特別の意味のあった3年間ではなかったのですが、今、振り返ってみて、実は人生の記憶の中に今も鮮明にあの頃の情景がよみがえってきます。過ごした時代は違っても、この会報を読んでいる東京の皆様にとって懐かしい思い出ではないでしょうか。私は、社会人になって最初に勤めたのが旅行会社でした。当時は団体旅行ブームで、国内はもちろん海外旅行にも行ける人が増え、そんな中30歳まで営業マンをしていました。

紀州五代梅



GODAIAN
五代庵

銀座 店〈直営店〉

東京都中央区銀座8-2-10

誠和シルバービル1F

TEL 03-3571-5858

創業天保五年

株式会社 東農園

0120-12-5310

<http://www.godaiume.co.jp>



猪の山からみなべの街を望む

今後、この梅産業従事者がどの方向に進んで行くのか、今、町の行政は頭の痛いところであります。しかし今まで何回もくり返した最悪の時代も何とか立ち直ってきましたので、次代につなぐ姿勢を示しながら

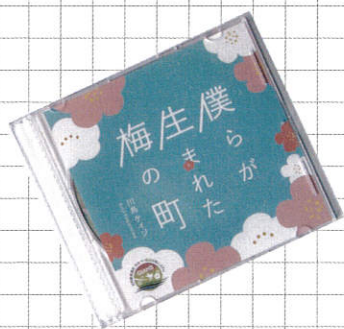
日々の仕事に打ち込んでいきたいと考えています。今後も全国にいる南部高校出身の皆様方には、ふるさと「みなべ」を応援してもらいたいと思っています。



昨年発行された「学友会東京支部だより」に掲載されていたシンガーソングライターの川島ケイジさんが、みなべ町のために昨年、作詞・作曲してくれました。その歌詞に、幼い頃育ったみなべを思い出されることでしょう。

ここに紹介して私からの手紙を終えたいと思います。

皆様方のご健康とご活躍をふるさとみなべからお祈りしています。東京の声がみなべに届く日を夢見て…。



流れるみなべ川よ 脈打つ山よ 命を咲かせて
陽の光浴びて 1日が始まる 空へと果実をかざして
一粒一粒の 愛の種を育て伝う 君の待つその笑顔を 浮かべるよ
梅の花を君に見せたい そう寒さに耐え強くひらく 美しい花を
梅の町を君に見せたい そう僕らが生まれた町

広がる 千里浜よ 灯る夕日よ 優しく映して
一粒一粒の 情熱と汗のストーリー 君を待つその未来へと 繋げるよ
梅の花を君に見せたい そう誇り高く白く染める 美しい花を
梅の町を君に見せたい そう僕らが生まれた町を そう僕らが愛する町を
空よ海よ山よ川よ きらめいて

※総会に参加された方に、この歌のCDをプレゼントいたします。(このCDは市販されていません)



千里ヶ丘球場



酸味のある
しそ漬け梅
【いきな】
塩分8%

ちどり梅



高級梅干し
「慶びの梅酌」
「黒糖の梅」を
格式ある千鳥模様に
詰め合わせました



とろり甘い
スイート梅
【スイートはちみつ】
塩分5%



卸部門



0120-10-3682

〒143-0024 東京都大田区中央6-30-1
株式会社ウメタ東京営業所
<http://www.umeta.co.jp>

お店



0120-10-3504

ばいおうえん
株式会社梅翁園東京直売店

営業時間：AM10:00～PM5:00 お休み：土・日曜日 祝日



帝釈天と寅さんが代名詞の 柴又ぶらり散歩

白鳥 友久 (東京都府中市 在住)
1971(昭和46)年
愛知県立名古屋西高校卒



柴又と言えば「寅さん」の町ですね

柴又帝釈天周辺を歩く、「初夏の散策」に参加させていただきました。私は南部高校出身ではありませんが、かつて同じ会社に在職して親しかった木村さんが誘ってくれ、今回は赤坂迎賓館コースに続いて2回目の参加です。

初夏の微風の中、爽やかな日差しに包まれて歩く、というシーンを想定していましたが、この日は空はどんよりと曇り、今にも雨が降り出しそうな天気でした。午前10時、京成柴又駅前に集合したのは15人。駅前の寅さんの銅像を囲んでワイワイやりながら記念写真を撮り、参道へ。



帝釈天は見事な彫刻と庭園が見もの

参道は、いかにも寅さん映画そのまま、どこかの店からひょっこり寅さんが顔を出しそうな雰囲気、門前の賑わいと下町の庶民的な空気を感じる通りのお団子屋さん、漬け物屋さん、土産物屋さんなどの店頭を覗きながら帝釈天へ。



山門前で2回目の集合写真を撮った後、本堂にお参りし、お堂の外壁にぐるりと巡らされた彫刻を鑑賞。帝釈天は有名ですが、木彫が見どころとは知りませんでした。非常に精巧に施された樺材の彫刻は各ブロックが、作者と制作年代が異なるにもかかわらず、全体として一つの小宇宙を形作って見事なものでした。しばし彫り物の魅力に浸った後、お庭を拝見。ここが都心とは思えない空間が広がっていて、片隅の滝からは水音がかすかに聞こえてきて、外人さんが庭園を眺めながらハガキを書いていた。考え考え筆を運んで、お庭の魅力を伝える言葉を選んでいく姿が印象的でした。

世界から認められた名庭園に遭遇

帝釈天の次は「山本亭」へ。ここは「山本工場」というカメラ部品を製造していた会社の社長さんが建てられた住居で、広大な敷地に歴史を刻んだ建物と、帝釈天のお庭に通じるような魅力ある庭園が整備されていました。なんでもアメリカの日本庭園専門誌が発表した日本庭園ランキングで2017年の第3位に輝いたそうです。美しい庭園は京都の専売特許ではないのですね。

山本亭を出て小高い丘をのぼるとそこは江戸川土手で、かの有名な矢切の渡しが見え、江戸川を眺めながら皆さんと楽しくお弁当をいただきました。

いよいよ「寅さん」ツアーのクライマックス



散策の午後の部は「寅さん記念館」と「山田洋次ミュージアム」。寅さん記念館は、まさに寅さんの魅力をギュッと凝縮したような展示で、一つ一つ興味深いコンテンツに時間の経つのを忘れました。帝釈天よりむしろこちらのほうが皆さんの関心が深かったのでは…?

「とらや」や「印刷所」のセットは、映画の場面とともに見ると、この中で撮ったのかと納得できました。また帝釈天の参道や寅次郎ゆかりの場所の模型、寅次郎が旅する各駅停車の列車をイメージした映像やセットなどもワクワクさせる面白い展示でした。

一方、ミュージアムのほうは山田洋次監督の実績を跡づける見どころの多い展観が並び、かつて観た幾つかの山田作品を思い出しました。

今回の散策は、寅さんの柴又にテーマを絞ったことで、楽しい「ぶらり散歩」になったと思います。幹事の皆様、たいへんお疲れ様でした。おかげさまで、行こう行こうと思いつつ、なかなか実現しなかった柴又街歩きができて満足しています。秋の散策も期待しています。また楽しい企画をよろしくお願いします。



京成柴又駅寅さん銅像前

よみがえった少年時代の夢

ひまなぼんぺい (千葉県松戸市 在住)
1965(昭和40)年 山口県立宇部高校卒

先日、神田神保町の古書店街をぶらついていると、文庫本や新書判を並べている道路際の棚に懐かしいものを見つけた。それはカップ・ブックスの『じゃぱん紳士』で、著者はドイツ語学者の早川東三だ。手に取って見るとカットは柳原良平で、間違いなく僕が中学3年の時に読んだものだった。発行は1961年4月5日、定価160円のを324円で買った。

頭の中が一気に昔の少年時代にまで引き戻されてしまった。

この本を読んだのは、もちろん自分で買ったのではなく、山口県にあったわが家に下宿していた大学生が「面白いよ」と言って貸してくれたのだ。

その頃、僕は外国にあこがれていた。海外に出たい。同級生とブラジルに移民しようかと真面目に話したこともあった。大島商船高等学校を受験して船乗りになろうかと思ったが、30キロ以上という体重制限にひっかかって無理だった。30キロ以下だと訓練に耐えられないということだろう。当時流行していた外国のペンフレンドとも文通していた。

そんな頃に出会ったのが『じゃぱん紳士』だった。そこには、海外旅行は夢だと思うだろうが、その気さえあれば誰でも行けるのだと書かれていて、いろんな手段が紹介されていた。僕が動かされた箇所を、買った古本から引用してみるとこうある。

「アメリカ人はヨーロッパ人に比べて、比較的意気に感じやすいらしい(別な言い方をすればオッチョコチョイ)。だから、大統領とか国務長官とか、あるいはゼネラル・モータースの社長などというお金のありそうな人に、『自分は生まれながらの親米主義者で自由世界親善のため、ぜひアメリカに行きたい』と、手紙を出してみるのも悪くないだろう。リーダーズ・ダイジェスト誌には、この種の術策で成功した人びとの記事が毎号かならず出ている。それからみても、アメリカでは、よほど実現性の高い方法であるにちがいない」

商船高校を断念し、普通高校から大学へと思っていた僕は動揺した。大学へなんか行かないで、工業高校



を出て少し働いてカネをためて外国に行くほうが手取り早いのではないか。あれこれ思い悩んだ末に、早川東三先生に手紙を書いた。住所はどうやって調べたかって? 当時は、奥付に著者の住所が載っていたのだ。ちなみに奥付には検印紙も貼られていて、「早川」という検印も押されている。東京都杉並区高井戸がどんなところかも

もちろん知らなかったが、「先生の著書を読んで、普通高校ではなく工業高校を受験するほうが外国への近道ではないかと思ったのですが、いかがお考えでしょうか」といった中身の手紙を書いたのだ。

すると10日もたたないうちに返事が来た。便箋3枚に、万年筆の丁寧な文字で中学生にも分かりやすく書かれていた。記憶に残っているのは「『何でも見てやろう』を書いた小田実さんも東京大学を出ていますし、『まあちゃんこんにち』を書いた山本佑義さんも試験に合格してアメリカのハイスクールに留学したのです。大学に行って、ちゃんと勉強をしてから海外に出かけるほうが得るものは大きいので、条件が許すのならばぜひそうするようお勧めします」といった中身だった。

本を出すような大学の先生から返事が来たのは驚きだったが、中学生の相談にきちんと応えてもらえたのがうれしかった。その後、高校2年の時だったか早川氏はNHKラジオ講座のドイツ語講師を担当されていて、僕はもちろん1年間勉強した。

今から思えば、笑いを取るために書いたような文章を読んだ田舎の中学生から手紙が来て、放っておけばこの子の人生を狂わせてしまいかねない慌てて返事を書いたに違いないが、相手が誰であれ真面目な相談ならば真摯(しんし)に応えなければいけないということを知ったのは間違いない。『じゃぱん紳士』を買ってすぐにネットで調べたところ、早川先生は去年の10月15日に亡くなられていた。

神田神保町の古書店街で見つけた『じゃぱん紳士』は、少年時代の夢と、僕にとって大事な教訓を図らずも振り返らせてくれたのだった。

※ひまなぼんぺいさんは会報12号で「二字とも動詞からなる名字」で投稿いただきました。

南部高校への期待

古久保 規夫 (田辺市下万呂 在住)
1963(昭和38)年卒



2018年10月26日、南部高校 昭和38年卒業のB組クラス会がみなべ国民宿舎で開かれました。3年間担任の大浦先生は、高齢にもかかわらず毎回出席してくださっています。学友会東京支部に所属の稲井清子(旧姓 真造)さんも娘さんのサポートで出席してくれました。参加者は20名でした。(これまで2年に1回開催)その席で、学友会東京支部の会報を見せていただき、同級生の坂本龍君の「ユネスコと能楽」も読ませていただきました。

会報に話が及ぶ中、稲井さんに、みなべの様子を投稿するよう勧められました。そこで、最近感じている南部高校への思いや願い、期待について書いてみることにしました。

今、南部高校は、学科を「普通科」と「食と農園科」に絞っています。「食と農園科」は昨年新しく編成したものです。それに伴い、新たに、かなり大きい校舎「食と農園科棟」が今年7月完成の予定です。

住民と生徒、学校職員の交流の場も開設されると聞いています。



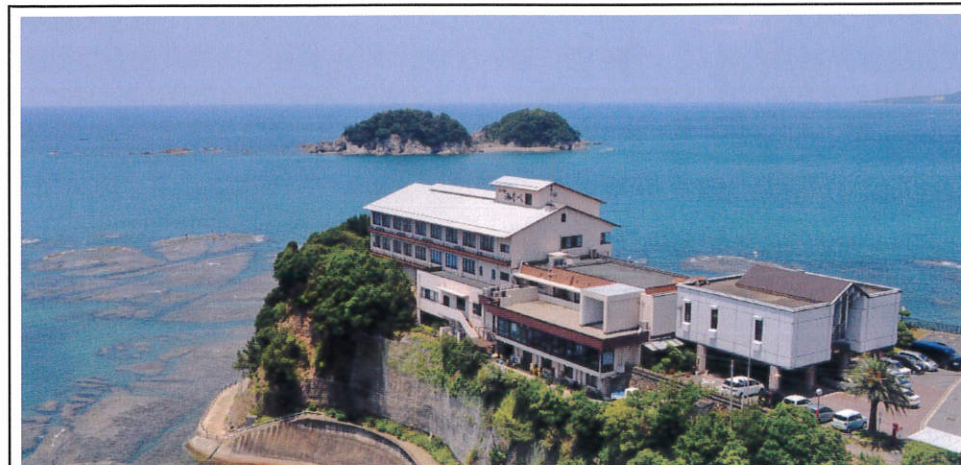
これらを活用して住民との交流を深め、普通科とともに「食と農園科」をどのように発展させていくかが重要視されます。そして、それは今後の学校の努力によるものと期待します。



近年、南部高校に対する住民の親しみの感情は、私が南部中学校や社会教育主事、上南部中学校勤務時代よりも低下しているように思います。それにはいくつかの要因が考えられますが、第一に考えつくのは、住民の南部高校に対する期待が大きく、その期待に応えられるような学校側の具体的な行動が見えづらいことです。もちろん学校側も住民の期待に添うように努力しているとは思いますが、その努力の具体的な動きが住民に伝わっていないことが大きな阻害要因になっているのではないのでしょうか。

私が思うに、みなべ地方の衰退防止と発展には南部高校は大切な存在です。そのことを、社会の急激な変化の中で、住民も学校側もおろそかに思っていることはないだろうかと心配しています。

南部高校の地域での位置は、少子化や過疎化など地方が廃れていく中では特に重要です。まず、学校側の意識の変革が必要です。地域に寄り添うとはどんなことなのか？住民や各地の卒業生に意見を聞く機会を設けて、これまでの惰性や先入観から脱して、目的を定め具体的な方向を求めていくことが大切ではないかと思います。県立学校ではありますが、市町村立学校だという意識に立ち、みなべ町や町長からの意見や助言をいただき、支援してもらえる環境を整えることから始まります。その過程の中で、今、地域が求めている高校像が見えてきます。また、住民側も変化の激しい社会の中での高校教育とは何か？と「問う」機会が生まれ、学校も住民側もお互いの求める道が開かれます。そうすることで、小・中・高の真の連携にも弾みがつくと考えます。



海を楽しむ宿 南紀・みなべ温泉
国民宿舎 紀州路 **みなべ**
〒645-0004 和歌山県日高郡みなべ町埴田1540
TEL. **0739-72-3939** (代表)
<http://www.kishuji-minabe.jp/>



卓上静物 油彩F6号

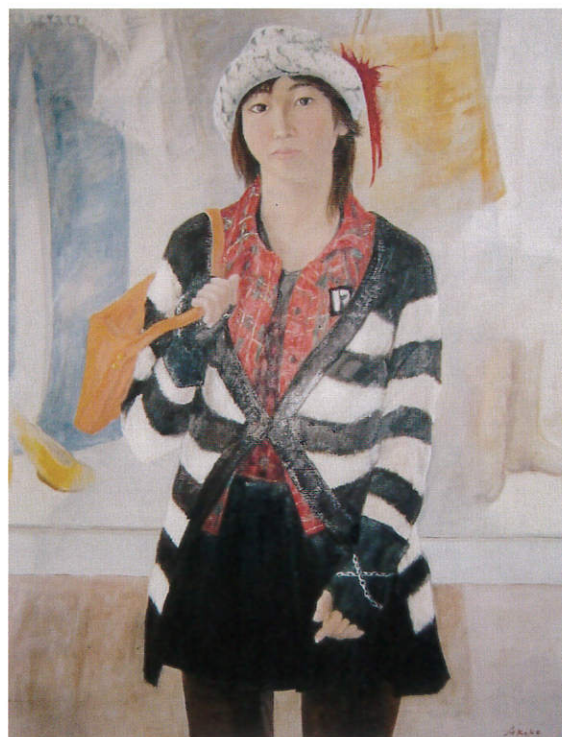


くちなしの花 油彩F0号

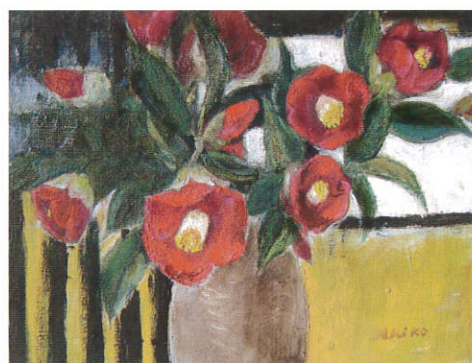


ページを繰る 油彩50号

2012年 千葉市展



若い人 油彩F50号



椿 油彩F6号

石田 明子さんのプロフィール

石田 明子 旧姓 浜田 (千葉県八千代市在住)
1956(昭和31)年卒

絵描きのうちに生まれ育つ
お父さんは故浜田 龍夫氏 画家・示現会
南部高校時代は美術部で鈴木重雄先生に教えを受ける
和歌山大学 学芸学部(現教育学部) 卒
大阪市立住吉中学校に勤務後退職
無所属

ナンコウウメ?? 楠公? 南高梅!

櫻井幹郎 (山梨県上野原市 在住)
1958(昭和33)年 都立青山高校卒



高校生の頃から私は謄写版の刷り手でした。その後タイプ印刷、活字凸版、写真植字、パソコン、デマンド印刷と印刷業の周辺をウロウロしながら暮らしをしてきた。そんなことから友人の木村さんからちょっと手伝ってくれよと声かけられて、会報「南高」のパソコン入力のお手伝いをするようになりました。みなさんも南部高校時代、先生方がガリ切りし、謄写版で印刷した試験問題を前に四苦八苦した方もいらっしゃるのではないのでしょうか。あの謄写版の刷り手でした。

山梨の谷間に暮らして十数年。集落の仲間たちは漬け物、みそ造り、梅干し造りに熱心なんです。中山間地でウメの産地というわけではないが、かつては地域のウメを収穫していたようですが、過疎化、高齢化から収穫する人は減り、最近では街のスーパーで購入している。で、季節になるとスーパーの店頭になンコウウメ入荷しましたと大書されている。そんなわけで私もナンコウウメ、ナンコウバイと耳にし、呼び名は聴き知っていた。

あおばしげれる…母親と唱った幼児時のあの「楠公」にあやかっただ商品名なんだろうなあ～、と思っていたのです。

一昨年の東京支部の総会に出席した。つぎつぎにナンコウウメの話が続く。ナンコウウメが南部高校から生まれ育った梅なのだという、だからナンコウウメなんだというそう。そりゃなんじゃ、びっくりする。南部高校の先生が生み育てたウメなんだそう。その先生の授業を受けた方々の話だから面白い。みなべ川の川沿いどこそこがナンコウウメの原産地。あそこの梅こそ元祖ナンコウウメなのだという話もあった。

そんな話を聞いていたので、昨年、夏前に「これで暑さに負けずに過ごしてください。熱中症予防になりますよ。」と敬老会から配られが蜂蜜梅になンコウウメとあったので、シールを見たら会報に広告されている会社の商品と気がついた、縁は異なるものだ、甘酸っぱい、味…

もう一つ気がついた。東京支部は南部高校の卒業生ばかりでないらしい。近隣の工業高校の卒業生や、ともかくみなべ町、田辺、和歌山とか紀州とか地域愛なのか、気分みたいなものでつながるらしい。東京では考えられない。どうも東京というコンロ上で「南部高校同窓会 東京支部鍋」でのゴツ煮、なんでもありの柔らかい繋がりが…これって、なんかこれからの日本社会の洒落たスタイルなのかも知れない。

事務局から

● 賛助会員新規入会 ●

今回、坂元 由紀 様 が入会してくださいました。
嬉しいですね。

● ご寄付ありがとうございました ●

下記の方々からご寄付いただきました。心よりお礼申し上げます。
会のために有効に運用させていただきます(敬称略)

栗岡 和美 前田 至美 坂本 龍 早田 早百合 岡村 茂子

編集後記

学友会の会員の皆様は令和元年の東京支部だよりを予定通りお届けすることができほっとしています。寄稿していただいた方々には厚く御礼申し上げます。

毎年発行時期を翌年に控えた12月頃に、誰に執筆をお願いするか悩む中で、今回は会員の知り合いで、支部主催の散策に参加の経験のある南高以外の高校を卒業された複数の方々をお願いしたところ、快く執筆を引き受けてくださいました。

毎年支部だよりの発行に当たり、ページの組み立て、レイアウト等をお願いしている櫻井さんにも執筆をお願いしました。

支部の行事には、南高卒業生以外にも会員の知り合い、親子で参加される方がおられ、皆さんと楽しんでいらっやいます。

支部の最大の課題は会員の若返りです。個人情報保護法の関係で卒業生名簿も入手できず、関東地方におられる卒業生の把握は難しい状況です。賛助会員、役員の高齢化に歯止めがかからない中で、支部の維持、支部だよりの発行を継続しているのが現状です。

支部だよりを毎年発行することで、何かの機会に南高卒業生の目に止まればとの期待をもっております。どうか皆様もお知り合いに学友会の存在を知らせていただければと思います。

(事務局 楠本)

編集スタッフ

木村 允彦 (TEL・FAX:048-786-3514) 齋藤 文子 神田 典子 三本 陽子 森下 武子 楠本 邦一